

日本IT書紀

02 溟滓篇

卷之一 契機

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

02 溟津篇

卷之一 契機

006 遍路

007 下天のうち

008 わたくしごと

009 偶然の資料

010 知らざる事実

011 手がかり

012 記憶の箱

006 遍路

第六

遍路

一

五月――。

この季節を語るとき、しばしば「風かおる」という言葉が使われる。

薫風、という言葉もある。

筆者など戦後生まれの世代は、テレビが真空管とブラウン管のモノクロ画面だった時代、NHKの第一放送で流れていた『おお牧場はみどり』という、のびやかな歌のイメージに結びつく。そのせいで誰しも、「新緑」「爽やかな初夏」というイメージを持っている。

ところが意外にも曇りの日が多い。それとメイ・ストームがある。翻訳すると「五月の嵐」。

台湾沖に発生した低気圧が急速に発達して北上する。複雑な気圧配置のために、進路の予測が難しい。たいていは日本列島に近づく前、太平洋の東方に逸れるが、十に一が沖繩諸島を北上し対馬海峡を渡る。

「五月晴れ」といいながら、「五月雨」という言葉もある。

日本という国は晴れたり雨が降ったりとまことにせわしないことだが、「五月晴れ」は四月中旬から五月中旬にかけてのころ、「五月雨」は新暦六月、つまり梅雨のことを指す。

江戸に幕府があったころ、「梅雨」という気象用語は存在しなかった。

五月で思い出すのは次の文章である。

三代の栄耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先ず高館にのほれば北上川南部より流る、大河也。

衣川は和泉が城をめぐるて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさし堅め夷をふせくとみえたり。

偕も義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

いうまでもなく『奥のほそみち』(平泉の条)であって、俳聖・松尾芭蕉が江戸在住の弟子・河合曾良を伴って平泉

を訪れたのは旧暦の元禄二年（一六八六）五月十三日だった。

ここに見える「大門の跡」とは毛越寺の山門の礎石であつて、一行はJR平泉駅から泉そば屋前を通つて柳御所、高館義経堂を経て中尊寺金色堂にいたつたことが分かる。

芭蕉は奥の細道に臨む二年前、

旅人と

我名よばれん 初しぐれ

と詠み、また旅立ちに臨む心境を次のように書いた。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。

舟の上に生涯を浮べ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

人は晩年に思ひいたると、旅に出るものであるらしい。

そのことを、江戸の時代の人々は

「遍路」

という言葉で表現した。

神社仏閣や霊峰への参詣を重ねる目的のほか、庶民が街

道を往くことは容易でなかった。

主要な街道が整つたのは徳川三代將軍家光、四代將軍家綱のころである。しかしそれは参覲交代の大名や遠地に赴く代官のためであつて、大きな商いをする者たちは主に船を用いた。松前船、日垣廻船が運んだのは文物ばかりではなかった。

庶民を相手にした宿屋が成り立したのは、「おくのほそ道」の旅からぐつと下つた文化・文政のころである。それでもなお、よほどの富者でなければ、路銀はおのれの懐に抱えて往くしかなかった。

その通行手形には、

万一何国にても病難・病死等仕り候わば、其の時の御作法に御取計らい下さるべく候。

尤も国元へ御付届けに及び申さず候。

其の為往来手形 仍て件の如し

の定型文が記されていた。

——もし自分が旅先で行き斃れたら、国許の縁者に知らせることなく、野辺に埋けてかまわない。

というのである。

旧街道から少し外れた古寺や堤の片隅にある石仏や土饅

頭は、その跡形であるやもしれない。

菜の花の野。海辺の路。山の木漏れ日。

そういう中を往く遍路はなるほど景色になる。ではあるのだが、その実態はこんにちわれわれの体験する旅とはおよそ異なっている。

二

二〇〇四年の五月三十一日は、前の日と打って変わってひどく蒸し暑かった。

二週間ほど前、自宅に宛てて、白い封筒が届いていた。

東京・日比谷の帝国ホテル

午前十一時半

孔雀の間

当日は朝からキャンセルできない役所の用事があった。歩けば十分ほどの距離をタクシーで行ったのは、気が急いでいたためだった。会場に飛び込んだのは刻限の五分前である。途中、エスカレーターで田中治彦氏と一緒だった。

——急でしたね。

——少し体調を崩された、とは聞いていたんだが。

というような短い会話をした。

取り急ぎ受付けを済ませ、深呼吸をして息を整えた。

会場には白布をかけた椅子が並び、後方に数列の空席があるばかりだった。ざっと見渡したところ、参加者は三百人ほどだったろうか。それほどの人が着席していたにもかかわらず、会場は静まり返り、たまにしわぶきの咳が聞こえる程度である。

正面に菊の花に包まれた祭壇が設けられ、よく見知った日焼けした顔が、新宿の高層ビル群をバックにしてにこやかに笑っている。

野崎克己——TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社創業者。

あと半年で七十六歳になるはずだった。四月二十八日、脳溢血のため死去。葬儀は親族と関係者で行われ、同社会長である船井一美氏を委員長として業界関係者向けの「お別れの会」が企画された。

受付けで渡された小冊子には、次のようであった。

生年月日

昭和3年11月1日

経歴

昭和26年3月 立教大学経済学部経営学科卒業

昭和38年12月 東京都港区神谷町で株式会社東京データセンター（現・TDCソフトウェアエンジニアリング株式会社）を設立 代表取締役 に就任
平成8年6月～12年6月 取締役会長
平成12年6月～ 相談役・社主。
業界活動

昭和46年5月～昭和58年5月 社団法人ソフトウェア産業振興協会の理事、常任理事、副会長、会長代行を務め、その間――

・昭和48年10月 通商産業省産業構造審議会情報化保険制度委員会委員

・昭和52年6月 協同システム開発株式会社取締役

・昭和56年10月 中小企業庁中小企業近代化審議会指導部会情報化分科会委員

情報サービス産業従事者の福祉向上、雇用の安定に取組み、「健康保険組合」「厚生年金制度」の設立に挺身

・昭和57年2月 情報処理産業厚生年金基金発足と同時に理事に就任

・昭和63年2月 同基金の理事長を務める

・昭和61年12月 財団法人ソフトウェア情報センター設立へ貢献

・平成3年5月 社団法人情報サービス産業協会常任理事

平成12年 現役を引退すると同時に全ての公職を辞任（自ら定めた定年制に沿って潔く後進に道を譲った）

賞 罰

昭和55年11月 通商産業大臣表彰（情報化促進への貢献）
平成元年 藍綬褒章受章（長年にわたる業界発展への功績）

「故野崎克己お別れの会」は肅々と進められていった。

かつて通産省の情報処理振興課長として、野崎氏らソフトウェア界の代表者と丁々発止で渡りあった吉田文毅氏、情報処理産業厚生年金基金の創設をはじめ業界活動で二人三脚の相方であったSRAの丸森隆吾氏、情報システム安全対策コンサルタントの北村亘氏がそれぞれに送る言葉を語り、現社長の河合輝欣氏が御礼の言葉を述べた。

参列者が祭壇に花を献じた。

ホテルの係りの案内で、列ごとに起立していく。座っていたのは後ろの方だったので、立ち上がった中に見知った顔がちらほらと見えた。

この種の会式に参列するのは初めてだったので、どういふ感想を抱いていいのかさえ分からなかった。

自分の番がきた。

白いカーネーションを献じながら、

――教えてもらいたいことが、まだ山ほどあったのに。

と思った。

次のインタビューは六月か七月のはずだった。

三

別の会場で軽食が供された。一画に、元氣だったところに写した野崎氏のスナップが飾られていた。

釣りが好きだった。

酒とタバコだけは、周りが何と言おうと止めなかった。奥さんを亡くしたあと、四国遍路を重ねていた。三度目の旅を思いついたらと、ふとしたことで足を痛めた。それでも杖を頼りに行った。すべての公職から身を引いたのはそのときだった。

上機嫌なときは、

「ハッ、ハー」

という笑い方をした。

最後に会ったとき、濃紺のスーツに合わせた中折れ帽が似合っていた。足を悪くしてから持つようになったステッキが、なかなかお洒落だった。

東京システム技研の北小路轟（のぶ）氏がいた。体が一回り小さくなって見えた。

——たまにメールでも下さい。

と言って、名刺の裏にメールアドレスを書いてくれた。アイエックス・ナレッジの安藤多喜夫氏がいた。相変わらずダンディだった。

元サイコムの加毛秀昭氏がいた。

——いまは熱海の伊豆山でのんびり暮らしている。遊びにおいて。

と誘ってくれた。

日本データ・エントリ協会会長の川口重信氏がいた。電算の河野健比古氏と一緒だった。

佐藤雄二郎氏がいた。情報サービス産業協会会長という重責にあつて、愚痴を吐き出すこともままならない。誰かがその部分を引き受けなければならない。

日本アウトソースの蓮生重剛氏がいた。

——書きためていた原稿を本にして出すつもりだ。と話していた。

キーウエアソリューションズの岡田昌之氏がいた。

——会長に就任したんだが、海外事業の責任者でね。近く海外に飛ぶんだ。

と意気軒昂そのものだった。

丸森隆吾氏が送る言葉を述べた後、じつと野崎氏の写真を見上げ、

——野崎さん、ありがとうございます。

と頭を下げた一言が、同氏の心から出た送る言葉だった。

——同窓会みたいだな。

誰かが言った。

式が終わったあと、廊下を歩いていると、専務の藤井吉文氏が駆け寄ってきて

——具合がよくなった。そう言って、たった一日だけ、久しぶりに会社に来られたんです。そのとき原稿に目を通してしましてね。うまいもんだ、とたいへん喜んでおられました。

倒れたのは翌日だった。

——そのときはもう意識がありませんでね。

最期まで潔かった。

原稿というのは、いずれ本書に登場する東京データセンター創業当時のエピソードである。喜んでもらえたと聞いて、救われた感じがした。

四国遍路の旅の中で、野崎氏も蝉時雨に足を停めたことがあったに違いない。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

泉そば屋 正式名は「泉屋」。JR平泉駅前、中尊寺通りに面していた。店主が気が向くと観光客に毛越寺や中尊寺、平泉の歴史を講釈してくれることで有名だった。二〇二一年十二月、百二十九年の歴史に幕を下ろした。

東京データーセンター 野崎によると一九六二年の春、個人営業の「東京機械計算事務所」を開業したのが始まりという。

神谷町と情報産業 一九五八年十一月、国策による「日本電子計算開発センター」があった。国産電子計算機を一堂に集めて、性能、信頼性、安定度などのデータを収集するため、プログラムの作成や有料の受託計算サービス、電子計算機の時間貸しなどが行われた。このため周辺にカード穿孔を行うパンチセンターやプログラム作成を請け負うソフト会社が事務所を設けていた。

ソフトウエア産業振興協会 SIA/一九七〇年五月施行の「情報処理振興事業協会等に関する法律」をトリガーに発足したソフトウエア開発業の業界団体。初代会長は国策で設立されたソフトウエア開発会社「日本ソフトウエア」社長の北代誠彌(きただい・しげひろ/1896~1986)だった。

協同システム開発 JSD/一九七六年四月、ソフトウエア開発業十九社と金融機関の出資で設立された。特許庁のシステム開発・運用保守を担うとともに、ソフトウエア工学の研究と実践などに取り組んだ。

ソフトウエア情報センター SOFTIC/ソフトウエア産業振興協会の附置機関だった「ソフトウエア流通促進センター」が前

身。一九八六年十二月、ソフトウエアの権利保護を目的に設立された。

吉田文毅 よしだ・ふみたけ/通産省ののち特許庁長官(一九八八年六月~一九九〇年六月)を経て発明協会理事長を務めた。

丸森隆吾 まるもり・りゅうご/1936~2011。一九六七年、沖電気工業から独立してソフトウエア・リサーチ・アソシエイツ(SRA)を創業した。ソフトウエア産業振興協会、情報サービス産業協会の副会長を歴任した。

北小路轟 きたこうじ・のぶ/東京システム技研社長、会長。情報サービス産業協会副会長を務めた。

安藤多喜夫 あんどう・たきお/データプロセス・コンサルタント(のち「アイエックス・ナレッジ」と改称)創業者。日本情報センター協会副会長、東京情報処理健康保険組合理事長などを務めた。

加毛秀昭 かもう・ひであき/日本計算センター(のち「サイコム」と改称)創業者。日本情報センター協会副会長を務めた。

川口重信 かわぐち・しげのぶ/1926~2023。アド・ビジネス・コンサルタント創業者。日本パンチセンター協会会長を務めた。

河野健比古 こうの・たけひこ/1937~2017。輸入車の営業の仕事を通じてパンチ業を知り、一九六七年十一月株式会社電算を創業した。日本データー・エントリ協会第四代会長を務めた。

佐藤雄二郎 さとう・ゆうじろう/1933~2010。一九八四年、日本ユニバックから独立しアルゴ21を創業した。

蓮生重剛 はすお・しげつよ/1931~高千穂交易に務めていたときコンピュータで初めて漢字を打ち出すことに成功した。

一九七一年渋谷コンピュータサービス(のち「日本アウトソース」と改称)を創業した。

岡田昌之 おかだ・まさゆき／1936～2013。

松尾三郎の女婿だった関係で三菱商事から日本電子開発に移籍し社長、会長を務めた。情報サービス産業協会副会長を務めた。

藤井吉文 ふじい・よしふみ／1942～一九七一年東京データセンターに入り、八四年取締役、八九年(平成一)常務、二〇〇〇年専務として東京証券取引所二部、一部上場を果たした。二〇〇七年社長となった。

007 下天のうち

第七

下天のうち

一

二〇〇一年三月、大川功氏が東京・新宿の病院で心不全のため死去。七十四歳だった。

大阪計算代行、日本計算センターを経てコンピューターサービス（CSK）を設立し、創業十四年にしてソフトウェアとして初めて株式を上場した。語り継ぐ経営が全国に散った弟子たちに受け継がれ、実践されている。経営指針を示し、あるいは個性を訴えるための著作は数多いが、客観的な評価はまだ世にない。

二〇〇二年八月、北川宗助氏が亡くなった。

黒澤商店、日本ワットソン統計会計機械、統計研究所、連合国軍総司令部（GHQ）戦略爆撃調査団、在日米軍立川基地PCS部隊、日本ビジネス、日本ビジネスコンサルタント（NBC…のち日立情報サービス）、日本情報開発（のちエヌ・アイ・デイ）という一生を通じて、この人物について語る書籍は自身が口述した『情報産業・この道六

十年』でしかない。同氏のもとから巣立って行った多くの人々が参集し、命日を期して「徳ぶ会」を催している。

二〇〇三年の一月、水野幸男氏が胃がんのため永眠した。日本電気のコンピュータ事業に草創期から参加し、情報処理営業計画本部長、コンピュータ支配人兼基本ソフトウェア開発本部長・情報処理営業計画本部長を経て代表取締役副社長。ソフトウェア工学の第一人者でもあった。

インターネットで検索すると八十件以上のヒットがあるが、事跡を伝えるのは情報処理学会のWebサイト「コンピュータ博物館」の〈日本のコンピュータパイオニア〉のみである。

二〇〇四年四月二十八日、TDCソフトウェアエンジニアリングの社主である野崎克己が亡くなった。このことは前節で書いた。

人に限らず、生あるものはいつか、必ず死ぬ。

IT分野向け書籍の出版で知られるコンピュータ・エージェンシーの広瀬正美氏によると、

——回顧の時期である。という。

同社はこれまでに『起業家ビル・トッテンITビジネス奮戦記』『情報サービス産業人物列伝・ソフトウェアに賭ける人たち』『空翔るM&A経営ソラングルーブ総帥北川

『淳治』などを出している。社史に代わる自叙伝的な企画がいくつか進んでいる。

——情報産業人物列伝というかたちで、シリーズ化できればね。

確かな手ごたえを感じているようだった。

この国に情報処理やプログラム作成の仕事が「業」として成り立つようになったのは一九六〇年代である。「コンピュータは体に悪い」だの、ソフトといえはソフトクリーム、ソフト帽の時代である。

経済産業省の特定サービス産業実態調査によると、二〇〇二年度の情報サービス産業の売上高は十三兆九千三百七十一億円、就労者は五十六万九千八百八十二人であるという。

企業数は一口に言えば七千社だが、九千社、いや一万二千社という調査結果もあつて確定はしていない。

ようやく全体の売上高が一兆円に達し、
——西暦二〇〇〇年には十兆円産業。

と夢を語っていたのは、つい二十年前である。これほど短期間にこれほど成長した産業は他にない。

その第一世代が現役を引退する。

有態に言えば、数年内に多くの人が鬼籍に入る。

——いま聞いておかなければ、記録に残せない。

それは確かにそうであろう。だが、記録に残す、とはど

のようなことか。

二

新聞社に勤めていた当時、ほとんどは唐突に数人の学生がオフィスを訪ねてきた。「情報」「IT」をうたった学部、学科がにわかに関設され、自ずから社会に臨む若者が増えた。卒業論文を書かねばならない。

——情報産業を総覧できる資料がどこかにありませんか。多くはそういう「迷える仔羊」である。

——神田の古本屋街で探しても、報告書の類はありませんから。

国会図書館や中央官庁の資料室、業界団体の図書室などにあるではないか——というのは、この場合、通用しない。彼らはその手立てを知らないし、どこにどのような資料があるかという所在情報を得ることができない。

さらにいえば、そのような資料、文献はどこを探してもない。

——いつか彼らの参考になる資料集をまとめておこう。と考えたのは、「下天のうち」を意識し始めたころだった。いずれ後進に道を譲るときがくる。

「下天のうち」とは、信長が好んで謡い舞ったことで知

られる。

人間五十年

下天のうちをくらぶれば

夢まぼろしのごとくなり

ひとたび生をうけ

滅せぬもののあるべきや

正しくは謡曲『敦盛』の一節であつて、文学的に解析すれば「末世の諦観」ということになるのではあろうけれど、筆者の場合、節目の意味でしかなかった。その年がやつてきたのだが、社の都合もあつて踏み切れないまま、忙しいだけの日常が繰り返され、時が過ぎた。

ここでの日常とは、毎朝八時までにオフィスに出て主要な一般紙と産業紙に目を通し、記者の一人ひとりにその日の指示を与え、作業のスケジュールを組み、自身の記事を仕上げ、かつ面担当が上げてくる記事を校閲し、配置と見出しを確認し、場合によっては全面的にやり直す。

活字として世の中に出す以上、内容を吟味しなければならぬ。曖昧な部分や不明な点を確かめ、前後矛盾する記述を訂正し読みやすく分かりやすい文に仕上げる。そういう日常が果たしてジャーナリストの仕事といえるか、とい

う疑問が根底にあつた。

二〇〇三年の一月、にわかな事情が生じた。

それというのは、実は五十という歳でフリーランスになる腹を固めていた。ミレニアムの年の晩秋、事務所の近くにある老舗の鰻屋で、社のオーナーにその話をした。

オーナーは

——それはあるまい。

とは言わなかつた。

——ダメだ、許さん。

とも言わなかつた。

——オレもお前に同じことを言いたかつた。

七十五を機に引退して、ハワイで悠々自適を決め込むつもりだつた、という。しかしお互い、いきなり、というわけにはいかない。

——七十五まであと三年ある。それまで付き合え。

そう言っていた人が、一年半後、にわか倒れた。

入院した三か月後、あれよあれよという間に儂くなった。

フツと気が抜けた。

日常が日常であることが唐突に色褪せてきた。

オーナーの株式を引き継いだ人とうまくやるつもりもなかったし、闘うつもりもなかった。当初、ソフトランディングということを考えていた。緩やかに高度を落とし、静

かに着地してエンジンを停める。ところが気がついたとき、知らないところで罷免の手続きが行われた。

いきなり目の下に山肌が見えた。

失速というより墜落に近い。

ゴールデンウィークが明けた初日だった。

取材を終えてビルの外に出たのは、午後四時を少し回っていた。朝からどんよりした曇り空だったが、かすかに日が射していた記憶がある。そのとき季節外れの台風が沖縄諸島に近づいていたのではなかったか。

ビルを出たとき、強い風に煽られた。突然のように

「メイ・ストーム」

という言葉と

「こころざし」

という言葉が浮かんだ。

二つの言葉がどう結びついたのか、うまく説明できない。

ともあれ、「メイ・ストーム」だの「こころざし」だの「下天のうち」だのが、渾沌の宇宙にポツカリと誕生し、急速に凝固していくのが分かった。

コンピュータの歴史というのではない。

ソフトウェアと情報サービスというのではない。

企業や人に照準を当てるでもない。

そうではない。何かをまとめ、書き上げなければなら

ない。あたかも自分に課せられた義務であるかのように思えてきた。

三

情報産業の専門紙に長く籍を置き、週刊であることを忘れて日刊紙と特ダネを競い、取材に飛び回ることが面白かった。それを虚しく感じるようになったのは、厭いたということである。

日常に厭いた者が日常を差配していいはずがない。道を譲らなければ、後進はいつまでも「部下」であり続けなければならぬ。

卒論であるとすれば、何をテーマとするのか。

繰り返しになるが、コンピュータの歴史というのではない。

いつ、どのようなコンピュータ（ハードウェア）が、どのような技術を備え、何という人によって設計され、世の中に提供されたか、ということについては、ほかに優れた専門の書がある。

また、ソフトウェア開発や情報処理サービスに限った歴史というでもない。

あるいは、人物に焦点を当てた伝記でもない。

——でき得れば……。――

と思ったのは、情報化を軸にした社会・産業・文化・生活の歴史を描くことである。この考えが正しいかどうか、自分にできることかどうかは、とりあえずどうでもいい。

やるか、やらないか。

当時、発表資料のままに原稿を起こすのは記者の仕事ではない、というように筆者は考えていた。仮に資料ベースで書くにしても、何かしら自分ならではの独自性を出したい。要するに、「取材のための取材」はしない。

——こんど会おうよ。

——ええ、いいですね。

という感じで、企業や業界団体の人々と会い、世間話（というか交友や裏話を種にした雑談）を交わす。その中から「ネタ」を拾うのである。

会う場所は相手のオフィスであったり、ホテルのレストランで昼食をとりながらであったり、仕事が終わったあと一杯飲み屋であったりする。

そのつどメモを取ったのでは相手は話してくれないし、こっちも面白くない。愚痴を聞き、あるいは自分の考えを述べ、業界のウワサ話に花を咲かせ、拾った「ネタ」を改めて取材する。つまるところ、記者という職業は聞き上手

でなければ務まらない。さらに記憶力と想像力があればなおいい。

あつちで聞いた話、こつちで得た情報を組み合わせ、類推し、まだ公表されていない計画や構想を引き出す。自分の推理通りだったり、当たり前といえども遠からず、だつたときは独りニンマリする。聞いたままを文字にするのだから、物語を創出する作家と比べ楽な職業であろう。

その者が、思いあがりの末に

——情報化を軸にした社会・産業・文化・生活の歴史。なるものを描こうと企んだのだから、突飛ではあった。

しかもこの者は、「下天のうち」などと嘯いているのだから性が悪い。

売れるか、ということには眼中にない。商業ベースで考えれば、特定の企業なり、個人なりに照準を絞り、どれほどが捌けるか事前にソロバンを弾くであろう。だが性の悪さが嵩じて、ついに

——いっそのこと博覧強記の原稿を書き上げるか。

——と思い立った。つまり知り得ることを調べ、調べ得ることを知ろうというのである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

日本計算センター 一九六〇年東京・芝公園に加毛秀明が創業した。七九年十月、社名を「サイコム」に変更した。

黒澤商会 黒澤貞次郎が一九〇一年東京・京橋に開いた事務機器・用品販売業「黒澤貞次郎商店」が前身。一九〇七年「黒澤商会」と改称し、森村商事からホレリス型パンチカード式統計会計機械装置の国内総販売権を引き継いだ。一九〇七年鉄筋コンクリート造三階建ての本社ビルを建設した。

『パイオニア紹介』 情報処理学会が作成している。その選考対象は同学会の会長もしくは学会活動に貢献した人物であって、二〇〇四年八月現在、掲載されているのは次の各氏である。

相磯秀雄、安藤馨、天羽浩平、雨宮綾夫、猪瀬博、飯島泰蔵、池田敏雄、池野信一、石井治、石井善昭、浦城恒雄、榎本肇、尾関雅則、尾見半左右、大泉充郎、大島信太郎、大野豊、岡崎文次、金田弘、萱島與三、喜安善市、岸上利秋、北原安定、清野武、小林大祐、後藤英一、後藤以紀、駒宮安男、坂井利之、塩川新助、嶋利男、城憲三、末包良太、清宮博、高崎勲、高島堅助、高田昇平、高橋茂、高橋秀俊、出川雄二郎、戸田巖、中澤喜三郎、中嶋章、西野博二、野口正一、萩原宏、渕一博、穂坂衛、松崎磯一、松下重恵、三浦武雄、水野幸男、三田繁、南沢宣郎、宮城嘉男、村田健郎、室賀三郎、元岡達、森口繁一、安井裕、山下英男、山内二郎、山田博、山本欣子、山本卓眞、和田英一、和田弘。

008 わたくしごと

第八

わたくしごと

一

わたくしごとから書き起こしたい。

オイルショックという出来事があった。

原油の価格が二か月で四倍に跳ね上がった。町の店先にトイレットペーパーや洗剤を買い求める長い列ができた。

原油が値上がりするとなぜトイレットペーパーや洗剤が不足するのか、因果関係がはっきりしないまま、物価が上がり商品が品薄になり、企業は採用を半減した。

——オイルショックですから。

というだけで、何となく通用した。

そのお鉢が回りまわって、内定取り消しというかたちで我が身に降りかかるとは思ってもいなかった。今のよに「フリーター」というような言葉がなかった。

アルバイトで始めたのはトラックの仕事だった。東京の麹町にある会社の社内メール便の仕事から始め、次に大きくて重い機械を運ぶようになった。その関係で三島や御殿

場に週一回のペースでトラックまたはライトバンを走らせた。

会社の名前は「バロース」というのだった。

事務所で伝票を受け取り、平和島の倉庫から積み出す。

港に荷揚げされたときそのまま、ダンボールと木枠で梱包されたマシンの、薄暗い倉庫に並んでいる。どれもこれも同じように見える。型式と品番を書いたラベルがその隅っこに貼ってあって、それを懐中電灯で照らして出庫指示の伝票と付け合わせればいい。

運び出すには専用の台車かフォークリフトを使う。

フォークリフトは、左に進むには右に、右に進むには左に、ハンドルを切る。分かってしまえばそれだけのことなのだが、最初はひどく戸惑った。

そのうち、自分が運んでいるのはどうやら「コンピュータ」というものであるらしい、ということが分かってきた。一台で何千万円、何億円もする。

——運んでいる途中で壊れたら、一生かかっても弁済できないぞ。

などと脅かされた。保険をかけてある、などということはない。ついぞ考えなかった。

幌つきの荷台に、使い古しの毛布でくるみ、ロープで何重にも固定する。輸送中に倒れたり、他の機械にぶつかっ



たりするといけない、という理由で、急ブレーキ、急ハンドルは御法度だった。代りに届け先への到着時間はゆつたりしていた。

ビルに運び込む場合には、廊下にベニヤ板を敷き詰め、エレベーターの内側にクッションを貼る。本体の下にローラーが付いているのだが、重すぎるために痕がついてしまう。そのためにはまず、管理会社の了解を取り、守衛さんに断りをいれなければならない。

コンピュータが大きくてエレベーターに入りきらない場合は、クレーンで吊り上げる。ときには窓枠を外し、壁を壊すこともある。

地方都市で、運び込むビルにエレベーターがついていないことが分かったときなどは、天を仰いだものだった。出るのは愚痴のため息でしかない。コンピュータをいくつのかたまりに分け、幅の広いベルトを肩にかけて、四人、五人の力で階段を持ち上げていくのである。

当時のコンピュータは、小さいマシンでも優に百キロ以上、場合によっては数百キロということもあったし、四角とは限らない。パンチマシンはデコラの板が厚く、あちこちが角ばっていて運びにくかった。周辺機器も同じ方法で運び上げる。かなりの重労働だし、支えている一人がこければ大怪我につながる。

二

あるとき、大阪の吹田にコンピュータを届ける仕事があった。東京を出発したのは午後四時だった。東名高速に乗ってしばらく行くと、大渋滞に巻き込まれた。

「この先、通交止め。一般道に迂回せよ」という。

大井松田インターチェンジで国道二四六号線に下りた。そこも大渋滞だった。二進も三進も行かない。わき道に入っても同じだった。長距離トラックのテールランプが長蛇の列をなしている。

今のように道路情報が的確に提供されていなかったし、カーナビゲーションや携帯電話があるはずもない。この先で何が起こったのか、さっぱり分からない。深夜では荷主に連絡することもできない。

ほんの少し動いては止まり、十分ほど止まっては少し動く。いくら待っても動かないので、前に止まっているトラックのドアを叩くと、運転手が居眠りをしていて、というようなこともあった。

ともあれ、芋虫のようにじりじりと進み、浜松のあたりで長い夜が白々と明けた。

再び高速道路に上がっても渋滞は続いていた。今度は養老サービスエリアのあたりでトラックが転倒しているという。寝不足に渋滞の疲労が重なったのに違いはない。再び一般道に下り、夕刻、ほうほうの体で吹田にたどり着いた。

公衆電話から届け先に

「いま、近くまで来たのですが」と連絡した。

このとき、初めて通行止めの原因を知った。

——田子の浦の近くにあるトンネルで百三十台以上の車両が燃えた。

という。

教えてもらった目じるしを目当てに探し探して進むと、ねずみ色の作業服を着た人のかたまりができていた。トラックを進めると人が両脇によけ、どうやらそれは届け先の工場の人たちで、自分に拍手を送っているらしいことが分かった。

荷主の会社の営業マンが駆け寄ってきて、

「よく届けてくれました」と肩をたたいた。

「もうダメかと思った」

その意味がすぐに理解できなかった。

「もう一時間早く出発していたら、君も事故に巻き込まれていたかもしれない」

納入先の人

「無事でよかった。食事と仮眠の部屋を用意してあります」

と言った。

到着が半日以上遅れたのに、礼を言われるとは思っていませんでした。彼らは真剣に、わたしがトンネルの中で焼け死んだのではないかと心配していたのだった。

雪の道ではタイヤにかけるチェーンが凍って、素手で掴むと大変なことになった。大雨の時にワイパーが故障して動けなくなったこともあった。梱包のダンボールをカッターで切っているうち、ダンボールの切り口で手のひらをザツクリ裂いてしまったこともあった。

苦しいこともあったが、楽しんでもいた。

それが縁で、ある受託計算センターに仕事を得た。

プリンターが吐き出した連続帳票を段ボールの箱に詰め、営業所に配って行く。そのときに受け取った伝票がパンチされてコンピュータにかけられる。

コンピュータ・ルームは寒いくらいに冷房が効いていた。真夏に外から戻ると、真っ先に飛び込んだものだった。

「いやあ、涼しい、涼しい」

半袖で大汗を拭うその脇に、カーデイガンなどを羽織ったオペレーターの人たちがいた。冷房が効いた部屋に閉じ

こもって仕事をしているのだから無理もなかったが、今から思うと珍妙な風景だった。

三

この時代のコンピュータ処理はパンチカードと磁気テープが中心だった。パンチカードには一行が八十桁と九十桁の二種類があつて、八十桁はIBMタイプ、九十桁はUNIVACタイプだった。

黄色を帯びた薄めの厚紙（まことに珍妙な表現だが）に、赤い線で孔を開ける欄が印刷されている。それがパンチマシンに送り込まれてきて、キーボードを打つ。キーボードで打つと、パンチカードに孔が開く。

その作業を「穿孔」といった。

穿孔室に入ると、何十人ものパンチャーが打つキーの音がけたたましかった。チーム・リーダーと作業の打ち合わせをするには、部屋の外に連れ出さなければならぬ。

穿孔されたカードは、順番に並んでストックされていく。その順番が狂うとたいへんなことになる。プログラムであればコーディングのライン順、データであれば伝票の順にカードが並んでいるわけだから、カードを納めた長細い箱（これが重い）を無造作に扱ったり、まして床に落として

カードを散乱させたときには、

——あーッ。

という悲鳴が周りから上がったものだった。

もう一度、最初から並べ直さなければならぬ。カードを読み取って、自動的に正しく並び換える専用の機械もあつたが、人海戦術でワツサワツサとやったほうが早かつた。それから数日は、皆から口を利いてもらえない。

——というようなことはなかったにしても、パンチカードこそ、計算センターのイノチだった。

磁気テープは、映画館でかけるフィルムのように大きなリールに巻き取られていた。それを何本も腕に通し、コンピュータ・ルームに運んでいく。当時、計算センターのコンピュータ・ルームは冷房がひどく効いていたこともあつたのだが、何となく、研究室のイメージがあつて、白衣を羽織ったオペレーターやプログラマーが少なくなかつた。

大規模なシステム開発には、「ディスクパック」というものを使った。パンチしてコンピュータに読み取らせるプログラムを記録するのである。いまでいうリムーバブル・ハードディスクだが、容量は一メガバイト程度しかなかった。そのくせ、とにかくべらぼうに高かつた。

コンピュータ・ルームの中央に、デン、と据えられるほど高価な装置だった。それを持ち運ぶのはSE、つまりシ

ステム・エンジニアの象徴であり、特権のように考えられていたから、重いのも我慢して胸を張って歩いたものだった。

少量のデータを記録するには、カセットテープを使った。ラジカセやコンポ・ステレオの音楽用カセットと変わらない。ガソリンスタンドの売上げ伝票など細々したデータを、ユーザーが専用機で入力し、カセットテープに記録した。そのカセットを計算センターに集めて、大型コンピュータで一括処理をする。ある意味ではバッチ型の分散処理だった。

あるとき、黒いソノシートが入った大きな、ほぼ正方形の封筒が手渡された。封筒の中央には丸く穴が開けられている。「磁気テープの代わり」という。

ソノシートというのは、薄いプラスチックでできたレコードのことである。筆者の子どものころ、童謡全集、世界名曲全集といった本の裏表紙に付いていた。向こうが透き通って見えるほど、薄い。グリーンやブルーの色が鮮やかだった。

手渡されたそれは、「フレキシブルディスク」略して「FD」というのだった。大きさからして十二インチのFDだったであろう。のちに八インチ、五インチと小型化し、ワープロやパソコン用にプラスチックのケースと金属のシ

ャッターが付いたとき、「フロッピーディスク」という呼び名が一般化した。

「少量のバッチデータであれば、これで十分」

という説明を受けた。だが、ペガペガで、いかにも頼りない。それにディスクパックと比べ、自慢気に持ち運ぶことができない。

——こんなものが信用できるか。

と思ったものだった。

朝早くに出勤すると、応接室のソファはもろろん、事務所の机の上といわず通路といわず、プログラマーやオペレーターが眠りこけていた。それは男性に限ったことではなかった。さすがに女性たちには会議室や応接室が割り当てられていた。

しばしば彼らを乗せて、早朝から開いている喫茶店や牛井店に行った。仕事が終わるまでが仕事、という意識もあつたろうが、全員が若く、独身の者ばかりだった。そのために大学のクラブや同好会の合宿に似た雰囲気がないでもなかった。次から次に仕事があつたが、そのうちの二割か三割はやらなくていい仕事、つまりミスのリカバーだった。

当時の計算センターは、しばしば業務が中断した。プリンタや連続帳票を切り離す「デイタッチャ」という機械が故障すると、コンピュータによる処理を続けることができ

なくなつた。それは複雑な構造をした機械が持つ物理的な問題だった。

ところがコンピュータのトラブルは、多くは操作する人間のミスだった。

プログラムやJCL (Job Control Language) に矛盾があれば、システムはabend (Abnormal End: 原因不明の停止) を起こし処理を進めてくれないし、コンピュータがはじき出す数値が間違っていたとしたら、それは人間の指示に従って正しく間違つたに過ぎない。そういう賽の河原のごとき徹夜の作業が毎日のようにあつた。

## ~~~~~ 補注 ~~~~~

オイルショック 一九七三年十月、第四次中東戦争をきっかけに石油危機が発生し、石油の価格が二か月で約四倍に値上がりした。これにより日本は経済的な打撃を受け、一時的なパニックによってトイレトペーパーや洗剤が店頭から姿を消す騒ぎとなった。また企業は新規採用を一斉に手控えたが、すでに新卒者採用が終わったあとだったため内定取消が多発した。石油危機を契機に、政府は石油備蓄を強化するとともに、代替エネルギーの開発や省エネルギー技術の研究に力を入れ始めた。一九八〇年には背広を半袖にした「省エネルギー」が売り出されたりした。

日本坂トンネル事故 一九七九年七月十一日、東名高速道路下り線の「日本坂トンネル」(全長二〇四五メートル)の中で、トラックと乗用車が衝突した。後続車両七台が止まりきれずに玉突きでぶつかり、後にトラックの荷物が発火してトンネル内に煙が充満した。避難のため置き去りにした車両百七十三台が次々に炎上し、七人が死亡、六十五時間も燃えつづけた。鎮火後、トンネル内の残骸を片付けるのに十日を要し、全面復旧するまで二か月間、上下片側一車線が仮開通した。物流の停滞など被害総額は約六十億に達した。

コンピュータ・ルーム 古くは「IBM室」、一九七〇年代は「電算室」「マシン・ルーム」などと称した。大型コンピュータを設置するには、コンピュータが発する熱を冷却する特別な装置や高電圧の配電が必要だった。そのため受託計算センターは二重床に配線を収納し、耐火・耐震設計の特別な部屋を用意した。コンピユ

ータ・ルームへの出入りは通産省が定めた「情報処理システム安全対策基準」の入退室管理規定に基づいて厳しくチェックされ、暗号キーが記録されたカードを差し込まないとドアが開かない仕掛けが施されていた。またコンピュータ・センターでは建物や事務室への出入りであっても所属や氏名を記帳しなければならなかった。

フレキシブルディスク 命名したのはIBM社である。日本工業規格では「フレキシブルディスクカセット」。

フロッピーディスク フロッピーの原意は「パタパタした」「クタクタとした」。初期のフロッピーディスクは直径八インチサイズが普通で、プラスチックの筐体も金属製のシャッターもなく、紙でできたケースに入っていた。パタパタ。クタクタという形容はまさにぴったりだった。

## 009 偶然の資料

第九

偶然の資料

一

わたくしごとの続き。だが、時を戻す。

どこまで戻すかというところ、筆者が本書を書くことを思い  
たつ経緯のところである。オイルショックから二〇〇三年  
六月に飛ぶのだから、ワープといったほうがいい。読者に  
戸惑いを与えることになるかもしれない。

新聞社の日常に厭いたこの者（筆者のことだが）は、な  
るほど「下天のうち」という思考はあったにせよ、「思い  
立ったが吉日」とばかり、前後の見境もなく走り出すよう  
なことはさすがにしなかった。諸先輩やITサービズ業界  
の親しい人々に相談することを忘れなかったのは褒めてあ  
げていい。

梅雨明けのころ、ある人と会った。

縷々、事情と状況を説明した。

「しおどぎ、というものかもしれません」

わたしは言った。

「これを発奮材料に、と考えているのです」

それを聞いて、相談の相手は私の年齢を聞き、

「で、これから何をするつもりかね？」

と尋ねた。

「とりあえず、自分の来し方をまとめておこうと思って  
います。卒業論文のつもりで」

と言うと、その人はややおいて、

「この業界で何年になるかな？」

と訊いた。

「前の仕事を含めると、三十年近くになりますか」

たしかに計算センターで仕事はしていた。

バッチ処理の伝票を回収し、パンチ室行きの箱に入れる。  
時にはパンチ室に直接持ち込む。パンチャーのチーフに頼  
み込んで仕事を割り込ませてもらい、明け方、眠そうな目  
をしたオペレーターを励まし、客先に頭を下げた。帳票の  
在庫切れに気がつかなかった担当者の代わりに、印刷会社  
まで車を飛ばしたこともあった。部長、課長あるいは得意  
先の担当者の送り迎えもした。

だがそれは、仕事をした、ということに過ぎない。

それだけの理由で、新聞社では「ソフト／サービズ担当」  
ということになった。

取材の仕方も分からないまま、入社とほとんど同時に取



材の現場に出た。名刺すらなかった。泳ぎを教えるのに、沖に漕ぎ出した舟から子どもを放り投げるのと似ている。

——御社担当になりました。ご挨拶に伺いたい。

そういうふうな電話で言え、と教えられた。

なるほど、広報の担当者が会う時間を作ってくれた。

約束した日に、指定された時間に向くと、

「もうちょっと勉強しておいで」

と言われることの連続だった。

会っておきながら、何だ、と思わないこともなかったが、それが業界の接し方だった。

訪問するのが初めてであれば、その会社について、あれもこれも分かっているはずはない。だが、分かるうとしない人間を受け入れるほど、企業は甘くなかった。ある意味でこの洗礼は親切というものだった。

後年、親しくなった広報マンの一人にその話をすると、

「いや、そんな失礼なことをしましたか」

と恐縮させてしまったが、わたしは感謝していたのだった。

最初に話を聞きに行ったソフト会社は、そのときまだ、従業員が二百七十人、売上高は三十億円前後ではなかったか。「ソフト協」「センター協」と呼ばれる二つの業界団体があつて、人が集まってはワイワイガヤガヤとやっている

感じだった。

そのうちおおよその枠組みが認識でき、業界の課題とさ  
れていることがあらまし理解され、多くの人の知遇を得て、  
様々な事柄を教えてもらった。

当時、情報産業の主役はコンピュータ本体だったから、  
新聞社のなかでソフト／サービ担当というのは枠役、添  
え物的な立ち位置だった。しかし幾つかの幸運が重なって  
ソフト／サービス会社からコンピュータ・メーカーの動き  
や次期新鋭機の情報を得ることができた。そんなこともあ  
つて、気がついたとき、名刺の肩書きが「編集長」になっ  
ていた。

「ソフト業界の歴史、みたいなことになるのかな」

「確認したいなものでしょうね。こころざしというか熱  
気というか」

「こころざし、ね……」

「それと……」

わたしは言いよんだ。

だが、その人は見透かしていた。

「それと、業界への恩返し、といったところかな？」

言いながらソファから立ち上がり、ファイル棚の引き出  
しから書類を探り当てた。

「わたしは結局、何もまとめることができなかったがね。

そういうことなら、微力ながらお手伝いさせていただこう。これを参考にしたらどうだろう」

渡されたのは、雑誌の抜き刷りを袋とじにした小冊子だった。

## 二

手渡された小冊子には、『座談会・ソフト協設立当時は振り返る』というタイトルがついていた。サブタイトルは、「14年間で世界会議を開催できるまでに発展」である。

総ページ数は十ページで、第一ページ目に座談会の様子を伝える写真が付いている。

出席者は

- ・吉田剛（ソフト協初代専務理事）
- ・大久保茂（㈱コンピュータアプリケーションズ社長）
- ・舟渡善作（日本コンピュータ・システム㈱社長）
- ・下條武男（日本コンピュータ・ダイナミクス㈱社長）
- ・司会・河端照孝（㈱コンピュータ・エージ社社長）

の五氏。

名前を聞けば、長く業界に在住の人なら、

「ああ、あの……」

という古顔ばかりである。

現役で頑張っている人もいれば、すでに引退した人もいる。間違いないのは「みんな歳を取った」ということだ。

少し長いが、その書き出しを紹介する。

河端

なつかしいお顔がそろったところで始めさせていただきます。吉田さんは、ソフト協初代の専務理事、数々の功績を残しましたが、専務理事のお仕事は、日本情報処理開発センター（現日本情報処理開発協会）の専務理事と兼任されてでしたね。

吉田

そうなんです。十五年ほど前になりますが、通産省から新発足するソフトウエア産業振興協会の専務理事をぜひ引き受けてくれと言われて……。発足する以前に通産省から頼まれて手伝った関係からです。

大久保

吉田さんには、発足前からお世話になりました。

この協会の発足前には、やはりいろいろありまして、河端さんなんか良く知っています。ごく当初は、ソフト業もセンター業も一緒になって一つの団体を作ろうということで、確かサンケイ新聞の当時社長であった稲葉秀三先生のところみんな集まっ

た。その当時のことは、たぶん、歴史に残っていないでしょうね。

河端

センター協が数年前にまとめた『センター協一〇年史』に少し出ています。四十三年頃ですが、金岡さん、大久保さん、塚本さん、大野さん、それに日本ソフトウェアの園部専務とかで何回も話し合いましたが、通産省の平松さん（現大分県知事）のあたりで二つの協会構想が生まれてきたんだと思います。

吉田

当時はMISブームに火がつく頃でね。私はそれよりもソフトウェアをこの日本に育てることが、情報産業を発展させる柱だということに燃えていた。確か当時「四社会」というのがあったね。大久保さんのところと、服部さんの会社と今はないが日本ソフトと、それに日本EDPの四社……。

大久保

「四社会」、懐かしいね。ありました。今、コンピュータ・エージ社から資料をもらったんですが、設立発起会社の資料ですが、この資料に載っている会社以外にもあったような気がする……。

下條

はじめに四社が集まって、何かしようということですが八社が増えたんですね。発起人会社が集まって四十五年六月に宮沢喜一通産大臣に、設立申請書を出して認めてもらったのですから、今の話は昭

和四十四年頃ですね。

河端

通産省のとりの飯野海連ビルの上のレストランに集まっていた頃ですね。四十四年秋ごろですよ。

吉田

年代は忘れたがよく集まったね（笑）

大久保

忘れたと思うようなことも多々あるが（笑）、覚えていますよ。法人資格をとる前、四十四年の十月頃から協会活動は始まったと思う。

舟渡

協会発足時の思い出とか苦労話が多いんですが、四十四年十月頃は十五〜六社で活動は任意団体で始まった……。

吉田

純粹主義だ。つまりソフトを専門にやる企業。これが誕生のバックボーンだったね。

昭和四十四年は西暦一九六九年に当たる。

——そんな昔の事を持ち出して、何の意味があるのか。——ただの懐古趣味ではないか。

と問われれば、筆者は回答に窮する。まず昔話と思えばいい。

三

「ソフト協」というのは、一九七〇年六月二十二日に発

足した社団法人ソフトウェア産業振興協会（SIA）のこ  
と、「世界会議」とは一九八四年六月十一日から十三日ま  
で、三日間にわたって東京・新宿の京王プラザホテルで開  
催された世界情報処理産業会議のこと。

——どこかで目にしたことがある。

調べると、それは『社団法人ソフトウェア産業振興協会  
十四年史』に掲載されていたものだった。奥付には「一九  
八四年六月」とある。日本情報センター協会と合併し情報  
サービス産業協会として発足するに際して、十四年間の協  
会活動をまとめた。

サブタイトルにある「世界会議」は一九八一年に発足し  
た国際組織「世界情報産業会議」のこと。世界主要国の情  
報処理サービス／ソフトウェア業団体が二年おきを集まっ  
て、各国の情報処理サービス／ソフトウェア産業の位置づ  
けや市場規模、サービス高度化の方策などを協議した。

その後、米データ処理サービス機構（ADAPSO）、  
ヨーロッパの業界団体が再編されたこと、日本の提案でア  
ジア・太平洋諸国をカバーする新団体「アジア・太平洋地  
域コンピュータインテグレーション」（ASOC  
IO）が発足したこと、受託計算業務に代わってソフトウ  
ェア分野とネットワーク・サービスのウエイトが高まった  
ことなどから、「世界情報技術サービス機構（WITSA）」

に改組された。

一九八四年に開かれた東京会議は、その二年前に開催さ  
れたマドリッド会議（スペイン）で、ソフトウェア産業振  
興協会の服部正会長が強力に招致して決定された。

会話の中に登場する人物を簡単に紹介しておく、「金  
岡さん」とあるのはインテック社長の金岡幸二氏、「塚本  
さん」はセンチュリリサーチセンタ（CRC）社長の塚  
本祐造氏、「大野さん」は野村コンピュータシステム社長  
の大野達男氏。この三人は計算センター業の黎明期を牽引  
した（社名・肩書きはいずれも当時）。

「園部専務」は日本ソフトウェアの園部達郎氏。日本ソ  
フトウェアのことは追って語ることになる。

「平松さん」は平松守彦氏。文中には「現大分県知事」  
とあるが、二〇〇三年の統一地方選挙の際、六期二十四年  
に及ぶ地域行政トップから引退した。

「服部さん」はソフト産業を代表する識者として知られ  
た構造計画研究所所長の服部正氏である。「正」は「まこ  
と」と読む。

また、大久保氏が語っている「ソフト業もセンター業も  
一緒になって一つの団体」というのは、「日本情報処理産  
業協会」構想のこと。当時の大蔵省・通産省の一部に、コ  
ンピュータ産業を国策の中枢に据えるべく、国が出資する

ハードウェア・メーカー、情報処理サービス・ソフトウェア会社をそれぞれ一社設立する構想があった。その発想は日本国有鉄道、日本専売公社、日本電信電話公社と大きく違わない。

座談会で会話を交わしている人たちも、その会話に登場する人たちも、一九七〇年のころはみな四十代だった。設置されていたコンピュータは日本中で五千四百台弱、情報サービス産業の売上高は四百億円に満ちていなかった。「ソフトウェア業とは何か」が論じられていた時代だった。ただ間違いなく、年二〇％に近い高成長を続けていた。

それだけに誰もが夢中で取り組んでいた。中には協立計算の高島洋一氏のように、「青年将校」をもって任じている人もいた。まことに乱暴な話ながら、情報サービス産業の次の時代を担う意気込みを、二・二六の決起になぞらえようとしたのであろう。

いずれも情報サービス産業の基礎を築いた第一世代といっている。気がつけば、多くの人が故人となっている。

筆者はたまに、

——自称ITマスコミの生きた化石。

などと冗談交じりに口にあることがある。以上の人々がバリバリの現役として会社経営と業界作りに邁進していたとき、直接言葉を交わしていることを考えると、あながち

間違いではない。

~~~~~ 補注 ~~~~~

金岡幸二 かなおか・こうじ／1925～1993。東京都生まれ。旧姓は「石坂」。東京帝国大学在学中に陸軍に徴兵され、満州・奉天航空基地に飛行生として配属された。一九四五年八月、特攻の命令を受けたが終戦となり、復員して再度、東京大学に入った。

一九四九年東大工学部卒、東光電気、大学講師などを経て一九六四年「株式会社富山計算センター」を設立し専務。七〇年「インテック」に社名変更と同時に代表取締役社長となった。

塚本祐造 つかもと・ゆうぞう／1918～1993。広島県生まれ。一九三八年海軍兵学校卒、海軍航空隊に入り真珠湾攻撃の第一波攻撃隊、ラバウル航空隊、横須賀基地で飛行教官、次期戦闘機のテストパイロットなどを経て首都防衛隊長少佐として終戦を迎えた。元軍人というだけで就職口がなかった。ようやく入社した野原産業という商社も倒産という憂き目にあつた。偶然、航空機部品の輸入を手がけようとしていた伊藤忠商事に元零戦パイロットの経験が評価されて入社、五五年航空機部長のとき米ベンディックス社が開発した技術計算用計算機「G-15」を輸入し、同機を設置した「東京電子計算サービス株式会社」を設立した。

大野達男 おおの・たつお／野村証券に入り五五年情報システム部長、六六年「野村コンピュータシステム株式会社」設立と同時に取締役、七〇年常務、七二年社長。稲葉秀三のあとを受けて日本情報センター協会会長に就任し、受託計算サービス業の高度化、ソフトウェア業との融合、通信回線の第一次開放などに尽力した。

平松守彦 ひらまつ・もりひこ／1924～2016。大分市生

まれ。一九四一年東京帝国大学に入り、四五年四月、繰上げ卒業で海軍主計学校に進んだが、終戦で再び東大に入り直した。四九年東大法学部を卒業し、商工省に入り産業公害課長を経て69年電子政策課長、74年国土庁長官官房審議官。電子政策課長のとき情報処理産業の育成振興が欠かせないことを訴え、情報処理振興事業協会等に関する法律の制定に尽力するとともに、IBM社によるコンピュータ特許クロスライセンス契約問題の解決や国産コンピュータ・メーカーのグループ化を推進した。

服部 正 はつとり・まこと／1926～1983。東京都生まれ。一九五一年東京工業大学工学部を卒業して電気通信省に入った。一九五六年に独立し建設設計事務所を開設、五九年「株式会社構造計画研究所」を設立し社長。六一年「IBM1620」を導入し、コンピュータによる構造解析の受託サービスを開始するのと並行して、情報処理サービスの健全な発展には業界団体が必要と訴え、東西に奔走した。六九年に「四社会」を結成し、これが七〇年発足の社団法人ソフトウェア産業振興協会の設立母体となった。

010 知らざる事実

知らざる事実

一

そのとき手渡された資料は、もう一つあった。

これも座談会のコピーで、表題は『戸谷深造さんと黎明期の情報産業政策』とある。本文の上に「通商産業省時代」とサブタイトルがある。

出席者は、

- ・加藤晃義（日本電気）
- ・小西純三（日立製作所）
- ・村上有秋（東京芝浦電気）
- ・廣田慶次郎（通商産業省）
- ・三水金一（日本電子計算機）
- ・司会・河端照孝（巴記者クラブ）

の六氏。ちなみに「三水」は「さみず」と読む。

十九ページにおよぶ記事には、

昭和三十九年の八月、戸谷深造さんは、通商産業省重工業局電子工業課長に就任した。日本で初めて開催されるオリンピックの開幕がもうすぐという頃である。（中略）当時、戸谷深造課長のもとで自動制御班長を務めていた廣田慶次郎を中心に、平成十二年八月八日、当時の業界三人男と新米記者が集まった。場所は東京・丸の内の日本電子計算機(株)応接室。

という序文が付いている。

平成十二年は西暦二〇〇〇年なので、「新世紀」を記念して立てられた企画であることが推測される。座談会の会場となった日本電子計算機は、業界では「J E C C」の略称で知られ、本書でものちに重要な役割を果たす。

出席者の所属を示す「東京芝浦電気」「巴記者クラブ」などは、座談会が行われたときのものではない。東京芝浦電気は「東芝」に社名を変更しているし、巴記者クラブはすでに存在していない。つまり、主題である戸谷深造氏が通産省の電子工業課長だったときに時計を戻しているのである。「新米記者」とあることで、序文を書いたのは河端氏であることが知られる。

サワリを抜粹すると、次のようなものである。

加藤 早く始めましょう。

河端 本場にこの人達は勝手なんだから。始めたくとも勝手に皆さん話をしているからなかなか切り出せない（また周りからチャチが再三）戸谷課長も今日はご臨席ですよ（やっと静かになった）エヘン。では、本日はお忙しいところ（回りからそんな形式的なこ）とより座談会に早く入りなさいよの声）うるさい人が多すぎてやりにくい（そんなことないから早くの声）では、エヘン、始めます。

村上 それだけならさつきと同じじゃないか。

お互いに茶化しあい、じゃれあっている景色が浮かび上がる。舞台裏で交わされたこういう会話を活字にすることは、まずない。それを載せたのは、当日の雰囲気を読者に伝えたかったからに違いない。

二

要するに「座談会」というのはタイトルだけのことで、「旧知が集まったの放談会」ないし同級会のワイワイガヤガヤに近い。細かな説明もない。まことに不親切きわまり

ない記事なのである。以下もまったく変わらない。

河端 ところでJ E C C創立が昭和三十六年八月。その時

も小西、村上、加藤のご三氏は大活躍しておるし、電子協が昭和三十三年三月に設立された以降もポリシーボード委員会等の準備とか色々と役所側との交渉に携わっておりますが、戸谷課長が就任して一ヶ月後に国産品愛用運動が始まりましたね。当時の大臣が福田一氏。政務次官には警視總監出身の田中栄一さん。そしてもう一方が竹下登さん。田中政務次官は有名人で、記者も総監、総監といつて戦後の帝銀事件とか下山事件の話に集まり、竹下さん淋しがつて実家のお酒を持ってきて配ってました。

廣田 I B M三六〇の発表は四月八日の花祭りの日でした。

私たち国産メーカーもこれに負けるなど新製品開発に走ったね。

村上 私たちもその全国運動興行の興行師の下請け作業を

手伝っていたいたわけだ。

廣田 戸谷さんが電子工業課長になったのが昭和三十九年

八月、その直後の十月一日に「電子計算機工業の国際競争力強化のための対策如何」という諮問が、通産大臣から電子工業審議会（会長倉田主税）に出さ

れました。丁度、東海道新幹線が営業運転を開始した日です。その審議のために審議会の中に電子計算機政策部会を作り、岡田完二郎氏（富士通社長）に部長をやっていただきました。そして翌四〇年四月、中間答申が出ました。その結果が昭和四十一年度の大型プロジェクト予算につながるわけです。

村上 ハードウェア開発の急務が指摘されて和田先生が骨をおったね。

小西 そうだ。電総研を退職して確か成蹊大学教授に移って間もない頃だよな。

加藤 それからが大プロに続くんですね。

序文で「業界三人男」と断っているだけあって、なるほど事情通である。通は、仲間内でのみ通用する隠語を使う。

それとよく似たもので、出席者たちは、時間を共有した一九五〇年代の出来事を確認しているに過ぎない。読み手に知識がないと、どうにもならない。分かる人にはこれで十分に分かるし、分からない人には手に負えない。

—— そうだったよな。

という「感じ」があるかないか。

下手をするところという編集は自己満足の閉塞に陥ってし

まうのだが、そうなっていないのは話の内容が空疎でないことと編集者の技とっていい。

以上のことから、多少なりとも業界団体にかかわりを持っている人であれば、筆者の相談に應對し、資料のコピーと助言を与えたのが河端照孝氏であることを推察するに違いない。

三

この人物には語るべきことが多い。

一九四〇年（昭和十五）、徳川直参旗本の家に生まれ、法政大学を出て一九六三年に産経新聞社に記者として入った。のち産経系列の「日本工業新聞」を経て一九七〇年から九三年（平成五）までコンピュータ・エージ社社長。同社は月刊誌「コンピュータピア」で知られる。

ややあつて通産省と情報産業界から請われて株式会社日本教育情報機器（ECS）の社長に就任したあと、二〇〇三年八月に日本情報処理開発協会（JIPDEC）特別顧問に転じた。

同氏によると、

「コンピュータと初めて出会ったのは、東京オリンピックだった」

という。すなわち一九六四年（昭和三十九）十月である。オリンピック取材班の一人として、「世界初のオンラインシステム」というものを間近かに見た。

通信回線のデータ伝送速度は最高で毎秒九千六百ビット、コンピュータが処理できるのはアルファベットと数字のみという時代だった。東京の千駄ヶ谷駅から神宮球場に抜ける途中にある日本青年館ビルに設置されたパンチカード式の電子計算機「IBM1401」（IBM1410だったともいわれる）が処理した出場選手の名簿と競技結果が、たちどころにリストになって記者団に届けられた。

そのために日本IBMは、総勢約四百人の技術者を張り付かせた。オンライン・リアルタイム機能をまったく備えていなかったパンチカード式計算機でそれだけのことをやってのけた技術陣は、たいした仕事をした。

翌一九六五年、アメリカのニューヨークで万国博覧会が開かれた。その特派員として空港に向かう直前、富士通の常務だった小林大祐から、

「あっちに行ったら、コントロール・データ社とバロース社に渡してほしい」

と、二通の手紙を預かった。

その中には、提携交渉を打診するメッセージが入っていた。他の国産コンピュータ・メーカーはそれぞれ、すでに

アメリカのメーカーと技術提携を結んでいたのに、富士通のみはパートナーを見つけないことができていなかった。しかも社内には

——当社は独自路線で行く。

と頑張っている技術者たちがいた。

こういう微妙な問題について新聞記者という職業の人間にメッセージを託すのは、よほどの信頼関係がなければならぬ。

富士通の申し出に興味を示したのはバロース社だった。当時のコンピュータ市場で第三位のメーカーで、特に会計処理用の小型機の分野が強かった。追いついて触れるけれども、その歴史はIBM社やユニバックス社より古く、こんちのコンピュータが備える機能の多くは、この会社を作った。

日本では高千穂交易という機械商社が代理店となっていた。もとは大阪にあった建築機材の商社だったが、六五年当時には東京の麹町に本社を移し、会計処理向けの中型コンピュータ事業が波に乗っていた。現在もJR中央線の四谷駅前に自社ビルを構えているが、この話柄の時代はバロース社のコンピュータを一手に扱い、たいそうな羽振りだった。

そこで、高千穂交易を窓口にして富士通とバロースの提

携交渉が進められた。両社は基本合意まで行きながら、出資比率やブランド名で折合うことができなかった。富士通は「FACOM」の名でシリーズに組み込み込まなかった。一方のバロース社は「B」のマークに執着した。

結局、ご破算になった。

「高千穂の鍵谷武雄社長が申し訳ながってね。それでアメリカの駐在事務所を通じて富士通のコンピュータを輸出することを決めたんですよ。仁義を果たした、っていうことでしょうか」

以後、河端はコンピュータ産業分野を得意とする記者、業界の裏方として日本電子計算機開発協会の設立に奔走した。電子工業課の戸谷深造と親交を持つようになったのは、これがきっかけだった。

前後して産経新聞系列の日本工業新聞に《コンピュータピアに架ける橋》を連載した。これが産業界の注目を浴び、連載のタイトルから名づけた最初のコンピュータ専門雑誌「コンピュータピア」を創刊した。同誌発刊元のコンピュータ・エージ社が『情報サービス産業白書』や『情報化白書』を刊行するのは、商売というより、創業以来の役目ということが出来る。

国内初の独立系ソフト会社となったコンピュータアプリケーションズ(CAC)の設立に至る現場を目撃し、日本

情報センター協会(センター協)、ソフトウェア産業振興協会(ソフト協)の原型となった「日本情報処理産業協会」を構想して通産省にかけあい、全国から十六大学の電子計算機同好会を集めた「日本学生電子計算機連盟」の発足を支援し、『コンピュータ白書』を発刊したり、「情報化週間」を提案した。IT業界専門のマスコミ出身者として、第一世代に当たる。かつ、産経新聞社長・稲葉秀三氏の私設秘書役として、業界の基盤形成に貢献した。

平生は温和で、語り口調は物静かだが、気を込めると眼光に鋭さが増し、その迫力は常人と大いに異なる。それもそのはずで、実をいうと、この人物は総合武道正誠館館長、国際武道連盟副理事長という別の顔を持っている。

名ばかりの職ではない。

居合いの名手であって、一九八七年(昭和六十二)、銅でできた兜を一刀に断ち切った。

「兜割り」と呼ばれる。

この技は、並の剣士では恐ろしくて挑戦できない。それを百年ぶりに成功させたことは、日本武道史に残る。かつ、作家・三島由紀夫に切腹の作法を指導した人物であることは、ほとんど知られていない。

~~~~~ 補注 ~~~~~

巴記者クラブ 一九六四年に創設された情報産業専門の記者クラブ。日本工業新聞、日刊工業新聞、電波新聞、電気新聞の四紙で構成し、一九六八年まで続いた。名称は事務所を置いた東京都港区の久保巴町(現・虎ノ門二丁目)に由来する。「巴クラブ」とも呼ばれた。

日本教育情報機器 ECS / 公立の小・中・高校、工業専門高校、特殊学校などにパソコンなど情報機器を普及させる目的で、一九九三年六月、国内の複数のコンピュータ・メーカーの共同出資で設立された。通産、文部、自治の三省の肝いりで設立されたレンタル会社だが、競合メーカーの集まりであるため、いづれにも利害関係を持たない河端昭孝に白羽の矢が立った。

世界初のオンラインシステム 厳密には東京オリシビックが、世界初ではない。国内では前年に日本国有鉄道、近畿日本鉄道が実験的なシステムを稼働させていた。しかし東京オリシビックのシステムは、複数個所にまたがって競技種目ごとに異なる集計方法を取り、しかも即時処理を行うなど、のちのオンライン・リアルタイム処理につながった点で特筆すべきシステムだった。

コントロール・データ社 CDC / 一九五七年にスペリーランド社からスピコンオフしたウィリアム・ノリス (William Charles Norris / 1911~2006) が創業した。科学技術向け中・小型計算機を得意とした。「CDC」の略称で知られる。ノリスと一緒にCDC社を立ち上げたシーモア・クレイ (Seymour Roger Cray / 1925~1996) が、のちにスーパー・コンピュータ

の専門メーカーであるクレイ・リサーチ社を設立した。

011 手がかり

第十一

手がかり

一

『戸谷深造さんと黎明期の情報産業政策』に出ている内容は、知らないことが少なくなかった。

知る由がなかった。

文中にある「J E C C 創立が昭和三十六年八月」に筆者は何をしていたかというと、父親の仕事の関係で移り住んだ新潟県の上野の「鹿瀬」という小さな町で、冬には雪かきで遊び、春には近くの土堤でノビルや蕨を採った。夏休みともなれば、とこどこに渦を巻く大きな川で泳ぎ、セミやトンボを追いかけていた。

それは決して比喩ではなく、実際、昆虫採集に夢中になっていた。小学校の図書館にあった昆虫図鑑を見たのをきっかけに、棲息してもいない金色をしたカナブンを捕まえようと考えたのだ。

社会というのは自分が住んでいる町の、さらに自分の家がある周辺半径一キロ、せいぜいが自転車で行ける隣町ま

で最大の範囲だった。トウキョーとは、山の向こうの遠い世界だった。

ただ、この業界に入ってそこそこに知識が蓄積された。その中の一つとして片言の概要を知ったに過ぎない。ここでいう「概要」とは、つまり表面的な出来事という意味である。

河端照孝氏から受け取った小冊子には「情報処理振興事業協会等に関する法律」より以前の、国によるソフト振興策が描かれていた。すなわち「日本ソフトウェア株式会社」である。

ただし、筆者にとって、その会社の名前は初耳ではなかった。

東京・狸穴にあったEDPアプリケーション・システムズ（のちクロスキャット）の佐藤清社長から、

「この会社を作る前は、日本ソフトウェアという会社にいた」

と聞いたことがあった。

「会社が解散ということになって、社員の行き先を決めたり、事務所をたたむ段取りを取ったりしているうちに、自分の落ち着き先を決めるのを忘れちゃってね」

それで仕方なく、会社を起こした、という話だった。

この話を聞いたのは一九八五年ごろで、そのときは「そ

ういう会社もあつたのか」と気にもとめなかつた。時期尚早ゆえに失敗した企業、という程度の理解だつた。

改めて調べると、その設立に当たつては通産省の主導で日本電気、日立製作所、富士通の三社が出資した。大型プロジェクトの一環として、初年度予算は四億円、それを五年間継続して投入したという。

当時の四億円は現在の十数億円にも相当する。とんでもない「知られざる事実」が明らかになつた。もつとも、筆者が知らなかつただけかもしれないが、業界の常識では、

——国がソフトウェアに施策を講じるようになったのは、一九七〇年から以後。

ということになつてゐる。

一九七〇年の五月に成立・施行された「情報処理振興事業協会等に関する法律」によつて情報処理技術者資格試験が始まり、ソフトウェア製品への助成事業が始まつた。

さらに調べると、その発端となつた大型プロジェクトというのは、超高速電子計算機開発事業というのである。ものものしい名前だが、「超高速」といつても現在のパソコンにどれほど及ぶか、という処理速度ではなかつたか。

性能・機能において、IBM社が一九六四年四月に発表した「IBMシステム／360」に対抗しうる国産コンピ

ュータを開発することに目的があつた。

「IBMシステム／360」は全面的にICを採用していた。アプリケーション・プログラムを入れ替えるだけで、技術計算にも事務計算にも使える。オンライン処理もこなす。三六〇度の全方位、という意味で「360」と名付けられた。当時としては驚異的なマシンだつた。

だけでなく、「シリーズ・アーキテクチャ」というものが、このマシンから始まつた。

それまでの電子計算機は、同じメーカーのマシンであってもモデルが異なると、プログラムを別に作らなければならなかつた。自動車ごとにガソリンやタイヤを特注するのに等しい。

ところが「システム／360」では、業務プログラムを一つ作ればよい。小型から超大型まで同じアプリケーション・プログラムを動かすことができたのである。オペレーティング・システム、すなわち「OS」というものが決めた手だつた。

OSとは、コンピュータの機械動作をコントロールする基本的なプログラムの集合体である。データのインとアウトを制御し、ファイルやアプリケーション・プログラムを格納し、データやプログラムの格納場所、つまり「アドレス」を管理する。



その対抗機を作るには、OSを研究し開発しなければならなかった。さらに機械のエラーを監視し、運用するための技術も必要だった。国産コンピュータ・メーカーが単独で取り組むには、あまりにも荷が重かった。アメリカは国防と宇宙開発の莫大な予算を投入してコンピュータを開発していた。敵うはずがなかった。

——しからば日本も、国の予算を投入して取り組むよりほかにないではないか。

ハードウェアにバンドルされるソフトウェアには違いがないが、ソフトの開発——目に見ることも、手に取ることも触ることもできない。訳の分からないモノ——に国の予算が適用された初めてのプロジェクトがここに誕生した。

## 二

当初の構想では、筆者の卒業論文は、前述の「情報処理振興事業協会等に関する法律」が施行された前年の一九六九年から書き起こすつもりだった。ところが、「日本ソフトウェア」は一九六六年十月一日に設立されている。

さらに『戸谷深造さんと黎明期の情報産業政策』で語られているのは、一九五六年から日本ソフトウェアが設立されるにいたる十年間のいきさつである。

端折るわけにはいかない。

その経緯についてわたしはどうかというと、おおまかには分かるにしても、その背景や前後のいきさつなど、細かなことになると説明できない。日ごろ何でも知っているように振舞っている記者にとつて、分からない、説明できない、というのは何よりもつらい。

日ごろから部下に、

「調べて分からねければ、調べたことを書け」

と言ってきた。

つまりは、一九五〇年代前半のことを調べればいい。調べるには「何が分からないか」が分かればいい。

折よく、『ソフトウェアに賭ける人たち』という本が手に入った。二〇〇一年十月十五日初版、梅澤隆・内田賢共著、コンピュータ・エージ社刊。そもそもは情報通信産業労働組合連合会の機関誌に連載された記事をまとめたものであるらしい。

表紙に巻かれた帯には、

日本の情報サービス産業における、さまざまなビジネスモデルを構築し、新しいITの展開を目指した二十四人の先駆者たち

とある。

先駆者と言うなら、他に取り上げるべき人物がいるのではないか、という向きもあるだろうが、類書が広く一般に提供されていないことを思うと一定の役割はあった。事実、これに啓発されて続編ともいふべき個人史が編集されている。本書もそのうちの一つ、という捉え方もある。

計二十九人のプロフィールが載っている。

——この中から、当時のことを知っている人たちにインタビューすればいい。

と考えた。補完する資料は、新聞社や雑誌社に山ほどあるではないか。

だが、わたしは肝心なことを見落としていた。

そうした人々の年齢である。

三

同書に登場する人物たちがコンピュータと初めて出会ったのはいつのころだったのか。登場順に列挙する。

大川 功 〓 一九六二年  
岡田昌之 〓 一九六八年  
松尾三郎 〓 一九五八年

奥田耕己 〓 一九六一年  
春日正好 〓 一九六一年  
西尾 出 〓 一九五八年  
狩野健司 〓 一九五六年  
岸田孝一 〓 一九六〇年  
北川淳治 〓 一九六〇年  
北川宗助 〓 一九二八年  
北小路轟 〓 一九七一年  
小宮善継 〓 一九六八年  
佐藤 孜 〓 一九八五年  
佐藤雄二郎 〓 一九五五年  
高原友生 〓 一九八四年  
種村良平 〓 一九六三年  
戸田保一 〓 一九五五年  
鳥川美光 〓 一九五九年  
大東 清 〓 一九五五年頃  
富野 壽 〓 一九六一年  
服部 正 〓 一九六一年  
中尾哲雄 〓 一九七三年  
金岡幸二 〓 一九六四年  
野崎克己 〓 一九五九年  
野澤 宏 〓 一九六六年

藤田史郎 〓 一九八八年

松平 緑 〓 一九六〇年

丸森隆吾 〓 一九七一年

村野兼雄 〓 一九八五年

『ソフトウェアに賭ける人たち』が編集されたとき、大川、松尾、西尾、大東、服部、金岡の六氏がすでに物故していた。さらにその後、北川宗助、鳥川美光、野崎克己の三氏が鬼籍に入っている。存命で一九五〇年代の様子を実体験として語ってもらえそうな人物は十指に足りるかどうか。

調べたいのは五〇年代前半のことなのだが、同書が扱っている人物のうち、コンピュータに最も早く出会った人でも一九五五年をさかのほらない。卒論の下調べに訪ねてきた学生たちと同じように、手がかりとしては心細い。

——さて、どうしたものか。

補注

イーディーピーアプリケーションシステム 一九七三年(昭和四十八)六月、東京・蒲田に資本金百万円で設立された「ニスコンコア」が七九年に社名を変更した。佐藤清、小林喜代志、尾野健治、白鳥進の四人が共同出資した。のち「クロスキャット」と改称した。

補完する資料 コンピュータ業界を専門に扱った最初の新聞媒体は「EDPジャーナル」(一九六八—一九六九)である。日本電子計算機開発協会系の出版社・EDP出版社が隔週刊で発行した。ほぼ同じ時期にマネジメント・サイエンス・クラブ(MSC)の会員制機関紙「ザ・デイリー・ネットワーク・ニュース」、日本能率協会発行の「EDPリサーチレポート」があった。また専門雑誌ではコンピュータ・エージャー社の「コンピュータピア」が最も古い。

登場する人物たち

大川 功 おおかわ・いさお／1926～2001…CSKG  
グループ創業者

岡田昌之 おかだ・まさゆき／1936～2013…キーウエ  
アソリユーシヨンス代表取締役社長

松尾三郎 まつお・さぶろう／1913～1998／日本電子  
開発創業者

奥田耕己 おくだ・こうき／1937～2022…トランスコ  
スモス創業者

春日正好 かすが・まさよし／1939…日本ナレッジ

ンダストリ代表取締役社長、アイエックス・ナレッジ代表取締役  
役員長

西尾 出 にしお・いずる／1924～1992…日本ナレッ  
ジインダストリ創業者

狩野健司 アイネス代表取締役社長、会長

岸田孝一 きしだ・こういち／1936…ソフトウエア・  
リサーチ・アソシエイツ創業メンバー、専務、最高顧問

北川淳治 きたがわ・じゅんじ／1927～2021…スタッ  
トサプライ(ソラン)創業者

北川宗助 1908～2002…日本ビジネスコンサルタント、  
日本情報開発(エヌアイデイ)創業者

北小路轟 きたこうじのぶ／1924…東京システム技  
研代表取締役社長、会長

小宮善継 こみや・よしつぐ／1945…カタナ創業者

佐藤 孜 さとう・つとむ／1929～2012日立ソフトウ  
エアエンジニアリング代表取締役会長

佐藤雄二郎 さとう・ゆうじろう／1933～2010…アル  
ゴ21創業者

高原友生 たかはら・ともお／1925～2009…CRCソ  
リユーシヨンス代表取締役会長

種村良平 たねむら・りょうへい／1940…コア創業者

戸田保一 とだ・やすいち／1930…野村総合研究所取  
締役員社長、CSK副会長、アルゴ21技術担当最高顧問。

鳥川美光 1936～2001…日本システムデザインベロップメ  
ント(NSD)代表取締役社長

服部 正 はつとり・まこと／1925～1983…構造計画

研究所創業者

中尾哲雄 なかお・つとお／1938 …… インテック代表取

締役社長

金岡幸二 かなおか・こうじ／1925～1993 …… インテッ

ク創業者

野崎克己 のざわ・かつみ／1928～2004 …… 東京データ

ーセンター (TDCソフトウェアエンジニアリング) 創業者

野澤 宏 のざわ・ひろし／1942 …… 富士ソフトウェア

研究所 (富士ソフトウェアC) 創業者

藤田史郎 ふじた・しろう／1929～2021 …… NTTデー

タ前代表取締役会長

松平 緑 まつだいら・みどり／1935 …… 群馬電子計算

センター (ジーシーシー) 創業者

丸森隆吾 しまりゅう 創業者

村野兼雄 くらの・かねお／1929 …… 日本電子計算代表

取締役会長

大東 清 1919～1997 …… 日本システムデイベロップメ

ント創業者

富野 壽 とみの・ひさし／1937 …… 構造計画研究所代

表取締役社長

二〇〇一年十月から二〇二三年一月までの間に、CSKグループ、

日本ナレッジ・インダストリー、アイネス、ソラン、カテナ、日立

ソフトウェアエンジニアリング、アルゴ21、CRCソリューション

ズの八社が姿を消している。

一九六一／昭和三十六年の出来事

【首相】池田勇人

・豪雪で日本海側の列車百本が立ち往生

・米…キューバと断交

・米…ジョン・F・ケネディが第三十五代大統領に

・NHK朝の連続テレビ小説「娘と私」

・ソ…有人宇宙衛星ポストーク1号 (搭乗ガガーリン少佐) が地

球一周

・大阪環状線が全通

・米…有人宇宙船の打上げに成功

・韓…朴正熙ら軍事革命委員会がクーデター

・南アフリカ連邦がイギリス連邦から離脱して「南アフリカ共和

国」に

・社会党大会委員長に河上丈太郎を選出

・米駐日大使にライシヤワー着任

・農業基本法公布

・ベルリンが東西に分断 (ベルリンの壁)

・ソ…五十メгатオン核爆発実験

・小児麻痺が流行

・チー37号偽千円札事件

話題の人…三船敏郎／大鵬幸喜／柏戸剛／クレージー・キャッツ

／川上哲治／フランク永井／北沢彪

死没者…桂三木助／赤木圭一郎／金城マツ／柳宗悦／小川未明／

ゲイリー・クーパー／アーネスト・ヘミングウェイ／カール・グ

スタフ・ユング／リー・ド・フォレスト

歌謡曲…上を向いて歩こう／川は流れる／コーヒールンバ／東

京ドドンパ娘／スターラ節／硝子のジョニー

食べ物…マーブルチョコレート／エンゼルパイ／クレープ／キッ

コーマン卓上ペン／ハイC

流行語…レジャー／プライバシー／不快指数／地球は青かった

書籍…極楽とんぼ／英語に強くなる本／何でもみてやろう／国民

百科事典

映画…(邦)名もなく貧しく美しく／モスラ／豚と軍艦／宮本武蔵

／用心棒(洋)荒野の七人／ウエストサイド物語／かくも長き不

在／蜜の味／ピリディアナ

テレビ…夢であいましょう／若い季節／シャボン玉ホリデー／七

人の刑事／ズバリ当てましょう

流行…タイトスカート／アンネ／テープレコーダー

## 012 記憶の箱

## 記憶の箱

### 一

一九五六年当時の情報産業界について書こうにも調べようにも、まとまった資料がない。仮にあったとしても、それだけに頼ったのでは実感のない空疎な文言を連ねるばかりであろう。

——どうにかして、生の証言を取りたいものだ。

半ば行き詰まりかけたとき、ある人物を思い出した。ずっと以前のことだが、その人が国から何かの表彰を受けたとき、インタビューをしたことがあった。

そのとき、

——一九五二年から六〇年まで、在日米軍の基地で計算機の仕事をしていたんですよ。

と語っていたのを思い出したのだった。

アイエックス・ナレッジの安藤多喜夫氏である。

インタビューをしたのはいつのことだったか——。

調べると、一九八七年の九月であることが分かった。

「何かの表彰」というのは、毎年十月に行われている情報化月間の「情報化貢献個人」の表彰だった。東京都情報処理産業健康保険組合理事長としての貢献が評価された。その取材をするために、東京・銀座のビルを訪ねたのだった。

そのビルには、しばしば取材で訪れた。安藤氏にはデータ・プロセスコンサルタント（DPC）「アイエックス・ナレッジ」に変更する前の社名）の社長としてだけでなく、日本情報センター協会、ソフトウェア産業振興協会の幹部として、あるいは東京都情報処理産業健康保険組合の理事長として、様々なインタビューに応じてもらった。

他のソフト会社が受付や会議室を華美に装っていたのに比べ、なにごとについても思いのほか質素だった印象が残っている。入居していたのが古いビルで天井が低く、照明がむき出しの蛍光灯だったということもあるであろう。

業界では、その名を縮めて「アンタキさん」と呼ばれ、親しい人はさらに縮めて「アンちゃん」と呼んだ。筆者の記憶の中で、この人はいつも濃紺のスーツに身を包んでいる。

——ソフト業界ナンバーワンのダンディ。

としても知られたが、経営は堅実で、浮ついた投機に走らなかった。



ソフト業界のバブル現象——成金趣味といつてもいい——の表れとして、金の指輪、豪華な社長室、社長専用のベンツ、福利厚生用と称するクルーザーや海外の別荘などが指摘される。実際、安藤氏もクルーザーを保有していた。ところがこの人の場合は、本当の趣味なのだった。

横浜育ちということもあつて若いときから海に憧れ、外国航路の船乗りになるのが夢だった。さらに商社マンとして世界を駆ける夢も持った。その夢が、わずかにクルーザーとして結実した。

ちなみに言うと、株式会社コアを創業した種村良平氏も、クルーザー乗りで知られている。種村氏は幼いころから海に憧れ、二百キロを超えるカジギを追い求めて自身の闘志を掻き立てる。この人の場合も、成金的な悪臭はない。

本社を芝浦に移した直後、銀座で会う機会があつた。

そのとき、

——いまは楽しくて仕方がない。

と話していた。

——高齢者用のパスで市内のバスが無料になる。何十年ぶりに乗り合いバスに乗って、電車で会社まで行く。これまで運転手つきの社用車で通勤していたから、街の様子とか季節の移り変りに目が行かなかつた。毎日が発見の連続だよ。

七十歳を過ぎて、こんなに生き生きした目を持っている人は、そうそういるものではない。

——七十の手習いで大学に通い、論文を書くのが日課。とも話していた。そのときから一年以上が経っていたが、長い付き合いの中で一年というのは云々するほどの空白ではない。

広報担当者に連絡すると、

——毎日が出社していません。

ということだった。

——でも、お伝えしておきます。

その数日後、安藤氏から直接の電話が入った。

取材の主旨を説明すると、安藤氏は

——そういうことなら喜んで。

一も二もなく引き受けてくれた。

約束の日まで、十日ほど余裕があつた。

ならば事前に知識を仕入れていくのが鉄則である。一九五六年という年はどういう年だったか。あるいは氏が創業した当時の業界はどのような状況にあつたか。

## 二

一九五六年——。

筆者はもの心すらついていなかったもので、世の中に関する記憶はほとんどない。というより関心は別のところにあった。つまり以下は、『日本史年表』（日本歴史学研究会編、一九九四、岩波書店）からの拾い書きである。

ときの首相は鳩山一郎である。前年の十一月に第三次内閣を組閣したばかりだった。

年が明けた一月一日、初詣でこったがえす新潟県弥彦神社で参拝客が将棋倒しとなり、百二十四人が死亡する大惨事が発生した。同日、原子力委員会が発足した。

二十六日に、コルチナダンペッツォで開催された第七回冬季オリンピックで、猪谷千春が回転競技で銀メダルを獲得した。ちなみに金メダルを獲得したのは、のちに「スキーをはいた映画スター」になるトニー・ザイラーだった。

二月十一日に高知県の繁藤小学校で、「紀元節式典」が強行されている。日本という国の紀元をめぐって、以後、「歴史的事実か国民感情か」という、端から噛み合うことがない空疎な論争が起きた。戦前の「紀元節」の復活を願う動きは、戦後十年で顕在化していた。

「週刊新潮」が創刊され、同じ月に石坂泰三が経団連会長に就任した。

三月十日、羽田空港の管理がアメリカから日本に移管されている。空の交通は戦後十年を経て、ようやく占領体制

から脱した。

四月には日本道路公団が設立され、全国幹線道路網の整備が始まった。一方、モスクワで日ソ漁業交渉がスタートしていた。日本側の代表は農林大臣・河野一郎だった。五月に入って「水俣病」が公式に確認され、公害が社会的な問題となり始めた。

まるで風土病であるかのような名の付いた症状についてこの年の十一月、熊本大学の研究班が「新日本窒素肥料の工場廃水に疑いがある」と発表して物議をかもした。経済発展を優先する政府も産業界も、その事実を認めたくなかった。

五月十九日には科学技術庁が発足し、日本登山隊がマナスルの登頂に成功し、売春防止法が公布され、フィリピン賠償協定が締結されるなど、国民の意識を高揚する出来事と戦後処理が交叉していた。

この年の政治的・社会的な話題は、沖縄における米軍基地問題だった。

前年の九月に沖縄基地所属の米兵が幼女を暴行して殺害する事件が起こっていた。そのこともあって、七月に沖縄県五十六市町村が一丸となる県民大会が開かれた。参加者は十万人を上回ったと伝えられる。沖縄関連では、この年十二月二十六日に行われた那覇市市長選で、沖縄人民党

の瀬長亀次郎が当選している。

瀬長はアメリカの軍政部から危険人物と目され、翌年、布令改正により市長の職を追われた。その後、一九七〇年、沖繩の本土復帰に伴う国政参加選挙で衆院議員に選出され、以後七期連続で当選した。九〇年に引退するまで反米・反戦・反基地の主張を貫いた。

八月、総評は第七回大会で「共産党とは共闘せず」の方針を撤回し、政府との対決姿勢を強めていた。六〇年安保闘争への布石が打たれた。二十五日、佐久間ダム完成。

もう一つの政治課題だったソ連との国交回復交渉は、五月十四日にサケ・マス漁業交渉が妥結にいたったものの、七月三十一日に領土交渉が決裂して暗礁に乗り上げた。

九月に入って、財界が鳩山一郎に首相引退を勧告したのがきっかけとなって、鳩山はソ連のブルガーニン首相に交渉再開を申し入れた。十月十九日、両国は国交回復に関する共同声明を発表し、十二月十二日に批准書を交換した。

十二月十四日、自民党大会で石橋湛山が総裁に選出され、鳩山内閣は同月二十日に総辞職した。強引に鳩山を引きずり降ろしたが、石橋内閣は六十三日しか続かなかった。結果として石橋は、保守本流を自認する岸信介の長期政権を用意する役割を果たした。

国際社会では、五月にアメリカがビキニ環礁で初の水爆

実験を行った。

おりからの梅雨どき、小学校の同級生と

——雨に濡れると禿げるぞ。

——放射能が入ってるからな。

——「黒い雨」っていうけど、ちっとも黒くないじゃんか。

などと言い合ったものだった。

スーダン、モロッコ、チュニジアが独立し、七月にエジプト大統領ナセルが米英の圧力を排除すべくスエズ運河の国有化を宣言し、対してアメリカはアスワン・ハイ・ダム建設の援助を打ち切った。これがきっかけとなって中東に緊張感が高まり、十月になるとイスラエル軍がシナイ半島に進攻して「スエズ戦争」が勃発した。

東欧ではハンガリーの首相ナジ・イムレがワルシャワ条約機構からの離脱を表明、これに対してソ連が軍事介入し、東西陣営に緊張感が高まった。米ソ冷戦の構図のなかで、中東と東欧が焦点となった。

流行歌「別れの一本杉」(春日八郎)、小説「鍵」(谷崎潤一郎)、『金閣寺』(三島由紀夫)。

経済企画庁が『経済白書』で使った「もはや戦後ではない」が流行語となった。だが庶民の実感としては、戦後の残照がいまだに強かった。

三

かすかに、このころの記憶がある。

このとき筆者は神奈川県に住んでいた。旧日本帝国海軍が払い下げた住まいの周りは一面の田んぼだった。遠くに富士山が見え、用水が流れる小川にはザリガニ、メダカ、小鮒、タニシなどがいて、木の枝に裁縫の糸を結んで垂らすだけで、面白くようにザリガニが釣れた。

あるとき、それが埋め立てられた。土砂の中に、キラキラ光るものがあつた。割れ口が滑らかなガラスのかげらで、日にかざすと虹の色が見えた。敗戦で破壊された日本軍戦闘機の防風ガラス——ということをし、しばらくして知つた。小高い山の裾に、縦に長い穴の口がいくつも開いていた。涼しいので、夏になると中で遊んだ。大人たちが、「ボーキューゴー」の中で遊んではいけない」と言った。防空壕のことである。

この年の夏、小学校の休みを利用して大阪を訪れた。白髪に祖父に連れられて歩いたのは、おそらく心斎橋あたりであつたらう。やや長じて、戦前、母の実家は代々、船場で回船問屋と口入れ屋を営んでいた、ということを知った。祖父は、最後の店主だつたことになる。

もつとも、その連れ合い（つまり祖母）によると、——仕事らし仕事はなくんもせんで、遊び呆けてましたがな。いつまでも「ボン」と呼ばれてましてな。

浪花節、浄瑠璃、義太夫に凝り、「浪花亭鬼鶴」の異名があつた。料亭を借り上げて襲名披露までやった。そのとき参集した一同で撮つた写真が残つていた。

——戦災で店が焼けて、身上をぜんぶ無くして、アタシはそれはそれは苦勞しました。

だそうである。

戦争が終わつて外地から引き上げてきた元奉公人が、旧主を頼つてやつてきてそのまま居候になつた。間口二間・二階建六畳三間の棟割長屋に、家族六人と元奉公人、合計十四人が同居していたという話に驚いた記憶がある。

孫がはるばるやつて来たのを幸い、かつて馴染みの心斎橋だかの繁華街に出かけ、上等な好物を食べられるとあつて、当人は浮き浮きしていたに違いない。

その祖父に、幼かつたわたしが尋ねた。

「あの人たちは何？」

街頭に軍隊の帽子をかぶり、白衣をまとつた人が、ハーマニカを吹き、アコーディオンを弾いていた。空き缶の前に置いて、両手をつけている人もいた。そういう人は片足がなかったり、二の腕から先が金属のフックであつたりし

た。顔の半分が火傷のケロイドで崩れている人もいた。

かすかに怯えた。

街を歩く人々に物乞いをしていたのだ。

シヨイゲンジン。

「傷痍軍人」と書くのだということは分からなかった。

戦争で傷ついた人たちに、国は冷淡だった。

事情は何も分からなかったが、その前を通り過ぎるとき、

なぜか痛々しく、後ろめたい気持ちがあった。大人たち――

一緒に歩いている両親ばかりでなく、街中の「健全な」生活を送っている人々――の空気が伝わってきたのだろう。

経済企画庁も、そのことは十分すぎるほど分かっていたはずだった。しかし、向こう五年先を常に見据えるのが政策というものであることからすれば、「もはや戦後ではない」という表現を使ったのは無理もないことだったかもしれない。

対して電子計算機は、真空管式が主力になりつつあったが、国産メーカーは真空管、リレー、パラメトロン、トランジスターのそれぞれを脈絡もなく個別に試作しているのが実態だった。つまり演算素子としてどれを主軸にするのか、明快な方向性は示されていなかった。

そうした中で通産省は機械工業審議会電子工業振興特別部会をテコに、「電子工業振興臨時措置法」や電子工業課

の新設などを模索しようとしたわけだった。  
なるほど、卒論のイントロダクションにふさわしい。

~~~~~ 補注 ~~~~~

東京都情報処理産業健康保険組合 東京都情報サービス産業健康保険組合 (TJK) の前身。

データー・プロセソコンサルタント DPC…一九九〇年、社名を「アイエックス」に改め、九九年十月に日本ナレッジ・インダストリーと合併して「アイエックス・ナレッジ」と改称した。

鳩山一郎 はとやま・いちろう／1883～1955。一九〇七年に東京帝国大学法学部を卒業し弁護士から衆院議員となった。

第二次大戦前に政友会幹事長、田中義一内閣で書記官長、犬養内閣、斎藤内閣で文相を務めた。五二年公職追放から政界に復帰し、日本民主党を結成して五四年十二月に首相となった。

猪谷千春 いがや・ちはる／1932～…千島列島の国後島に生まれ、三歳からスキートの英才教育を受けた。十六歳のとき東京・銀座のスポーツ用具店でA I U生命保険の創業者であるコーネリアス・スターと知り合い、それがきっかけとなって海外のスキート大会を転戦した。

トニー・ザイラー Anton Sailer／1903～2009。オーストリアのキッツビューエルという町に生まれ、一九五六年のゴルフ・ダンベッツオ冬季オリンピックで三種目に金メダルを獲得した。のち映画俳優に転身した。

この国の紀元 初代・神武天皇の即位は、『書紀』では「辛酉年春正月庚辰朔」すなわち一月一日であって、二月十一日ではない。明治初年、グレゴリオ暦に移行した際、『大日本史』を編集していた藤田一正が「陰暦一月一日は太陽暦の二月十一日に相当」とし

た。

石坂泰三 いしざか・たいぞう／1886～1975。東京帝国大学大学院を経て通信省に入り、一九一五年第一生命社長・矢野恒太の秘書となった。三八～四六年第一生命社長、四九年東芝社長、五六年経団連会長に就任した。五八年アラビア石油会長、六八年大阪万国博覧会会長を務めた。

水俣病 一九五三年から五九年にかけて熊本県水俣地方に発生した公害病。

瀬長亀次郎 せなが・かめじろう／1907～2001。

石橋湛山 いちばし・たんざん／1884～1973。日蓮宗久遠寺宗主の長男として東京で生まれ、一九〇七年早稲田大学を出て東洋経済新報社に入った。大正デモクラシー、普通選挙期同盟会の活動家として知られ、第二次大戦後の四六年、日本自由党に加わった。鳩山内閣で通産相を務め、五六年十二月に首相となったが、病気を理由に二か月余で総辞職した。

ビキニ環礁 米軍が行った水爆実験は、広島に投下された原子爆弾「リトル・ボーイ」の一千倍を上回る放射能を大気中に放出した。近くで操業中だった日本のマグロ延縄漁船「第五福竜丸」が死の灰を浴び、乗組員二十三人が急性放射能症にかかった。第五福竜丸は東京・夢の島にある展示館に保存されている。

ナジ・イムレ Nagy Imre／1896～1958。

ソ連の軍事介入 いわゆるハンガリー動乱。ハンガリー共産党の強権滴支配に反対する市民三千人が亡くなったとされる。

経済企画庁 総理府の外局で長期経済計画の策定を中心に、中央省庁の経済政策の調整や関連事項の調査研究を行った。一九四六年(昭和二十一年)八月に設置された経済安定本部を前身に、一九

五五年（昭和三十）経済審議庁から改称した。
電子工業振興臨時措置法 一九五五年四月に財団法人電波技術協会に電子計算機調査委員会（委員長・山下英男）が設置され、電子計算機の調査が開始された。通産省はこれを受けて一九五七年六月に電子工業振興臨時措置法（電振法）を制定し、電子計算機およびその周辺装置の開発研究、生産合理化などに対して補助金交付や設備合理化融資が行われた。

日本IT書紀 02 溟滓篇 卷之一 契機

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。